
秘密

佐々木叶

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

秘密

【Nコード】

N5248J

【作者名】

佐々木叶

【あらすじ】

屋上から飛び降り自殺をしたクラスメイト。そしてまた死んだクラスメイト。全部自殺？ 事故？ 隠そうとしている秘密とは何？……どうしてこんなことになってしまったんだろう。

はじまり

それはいつもの月曜日。

太陽が地上にいる人々を暑さで倒すような温度で見下ろしていた。空は珍しく雲ひとつ無い綺麗な空をしていた。

ここ街一番の進学校、幸盛高校の屋上から一人の女子生徒が飛び降りた。

ドスンと鈍い音が響く。

そのコンクリートの上に、うつ伏せで倒れている彼女。目を見開き、視点はどこにも定まっていはいない。頭からはドロリと赤黒い液体が溢れ出し、辺りはまるで血の海のようなようだ。

「おい、あそこで倒れてるものって人が……」

数分後、落下音を聞きつけた二人の男子生徒が彼女を発見した。

「やばくね、血が出てる……」

焦る一人の男子生徒が、息をつまらせ、血を避けるように彼女に近寄る。

「じ、自殺……？ しかもコイツ、二組の木町じゃね……」

もう一人の男子生徒が、啞然と彼女をただ見つめる。

彼女の名前は木町雪穂。

高校二年生の夏、彼女の命はこの日消え去った。

開幕 【裕樹】

あの死から丁度一ヶ月。

伊形裕樹は、何度もテレビや雑誌で取り上げられた彼女の事を思い出していた。

「木町……雪穂……」

彼女が倒れていた場所が裕樹のクラスからよく見えた。

裕樹も彼女の無残な姿を目にした。彼女の周りに野次馬が集っていた。裕樹もその中の一人だった。

彼女が発見されたのは、放課後のことだった。

今でも鮮明に覚えている。真っ赤な血の海。横たわる木町雪穂。目に映っているソレが人とは程遠いものようだった。それほど、その光景はショックなものだった。

「裕樹、もうその話やめようよ」

「響子……」

席に座りながら窓の外を見ていた裕樹に、片岡響子が悲しそうな顔をしながら声をかけた。

「雪穂のこと、もう考えるのはよくないよ」

裕樹は自分が、彼女の名前を無意識に呟いていたのに気がついた。

「ごめん、響子……」

裕樹は、響子を見上げるように謝ると、もう一度彼女が倒れていたあの場所へ目を向けたがすぐにそらし、立ち上がった。

「ちょっと、どこ行くの裕樹。もう鐘鳴っちゃうよ」

裕樹はその言葉を見殺しにしてそのまま教室を出て行った。困った響子はその後についていった。

教室を出た裕樹は、一番近くの階段を上がり始めた。響子は、裕樹がどこへ向かうのかを察する。

「裕樹……そこ行くのやめようよ。ほら、立ち入り禁止なんだし……」

「響子だって思ってるだろ」

「え？」

裕樹は、最上階まで上がると、「立ち入り禁止」と掲げられたコーンをよけてそこにある扉のドアノブに手をかける。

「木町雪穂が死んだのは、俺たちのせいだって分ってるだろ」

裕樹は、握っているドアノブを回す。扉は何の抵抗もなく簡単に開いた。この校舎も随分と古い。立ち入り禁止とはなっているもの、

鍵が壊れているので入ろうと思えば入れてしまう。

その瞬間、心地よい風が二人の髪の毛を揺らした。

「俺たちが止めていれば、木町は死ななかった……」

開幕#2

「やめてよ裕樹。仕方なかったんだから……」

「仕方ないって何がだよ。木町は自殺したんだ。その理由がクラスからのいじめなんだよ」

「たえそうだとしても、私たちは悪くないよ……」

響子は俯きながらそう呟いた。

今日もまた、気持ち良い風と共に太陽が照らしている。そう、丁度三週間前のあの日と同じ。

「俺たちは悪くない？ 何でそんな事が言えるんだよ」

「裕樹……私たち、つきあってるんだよ……」

「そうだけど、それが今、何と関係あんだよ」

「付き合ってるんだから、もうちょっと私の気持ちも考えてよ……」

力なさげに響子は俯き、呟く。

裕樹は響子に気づかれないように、小さくため息をつく。

「ごめん、悪かった。少し言い過ぎた」

木町雪穂が亡くなる約一週間前の事だった。同じクラスの片岡響

子から告白された。響子は特別可愛いわけではなかったが、笑顔が良く似合う女の子で、みんなから慕われていた。特に断る理由は無かった。響子には悪かったが、裕樹は軽い気持ちで付き合ってみることにしたのだった。

「でも響子、俺たちも加害者なんだよ」

響子のこういう所が疲れる……。裕樹は思いながらも、まさか本人に言えるはずもなく、胸の中にその言葉をしまい込んだ。

「何で加害者になるのよ……。だって雪穂が死んだのは……。ノイローゼが原因で自殺したからでしょ？ 学校だってテレビだって雑誌だって、周りの人はみんな言ってる」

木町雪穂の自殺原因は、「生きる希望がない」というメモが木町の部屋から見つかった事により、鬱やノイローゼが原因で自殺したと世間にそう公表されている。だが、本当は違う。クラスからの虐めが原因で木町は自殺したのだ。根拠などない憶説だが、裕樹はそう確信している。

「もうやめようよ。こんなこと話したって何にもならないよ……」

響子は歯を食いしばり、涙をこらえている。

「真実を言えばいいんだよ。学校にでも、マスコミにでも」

「そんなことしないでよ！」

響子は声を張り上げた。驚く裕樹に弱々しく続ける。

「そんなことしたら……裕樹が……」

最後は言葉をつまらせるが、裕樹には響子の言いたい事が伝わった。

「大丈夫だよ。人が一人死んでるんだ。二度も繰り返すような馬鹿な連中じゃないだろ」

学校側も、苛めの事について調べていた。全学年で木町雪穂のいじめについてのアンケートを行った。裕樹もそのアンケートに答えた。だが裕樹は素直に答えることができなかった。

もしいじめがあつたと広まった時の事を考えた。自分が真実を書いたら……。自分もまた、木町と同じ道を歩くことになるのかと思うと、あの時はペンを動かせなかった。

そう思ったのは裕樹だけじゃなかったのだろう。響子も含め、いじめの存在を知っている者全員が本当のことを言えなかった。現に、いじめについて公になっていない。

あの時、いじめについて書かなかったことを裕樹は今更ながらに後悔していた。

教室から見えるあの現場を見るたびに、木町に申し訳ないと胸が痛む。逃げてばかりじゃだめだと気づいた。

「響子……」

「……やだよ、私。悪いのは雪穂をいじめたあいつらでしょ！ 私たちは悪くない！」

響子は裕樹を睨むと、駆け足で扉の向こうへと消えた。

屋上に一人残された裕樹。

「どうしたらいいんだよ……」

頭をボリボリとかきながら、困り果てる裕樹。

彼女という存在に、少し疲れを感じた裕樹は大きなため息を漏らす。

相変わらずの青空はのんきに裕樹を照らしていた。

開幕#3

それから三日後。

響子とは、屋上で話したきりだった。目があってもあわててそらす。

裕樹はそんな響子にどんどん嫌気がさしてきていた。

一限目の授業が終わると、裕樹の席に松村弘幸が近寄る。

「裕、お前片岡と喧嘩したんだ。ついに破局……！」

まるでこの状況を楽しんでいるようだ。

お気楽な性格は、うらやましい。コイツは自分さえよければそれでいいんだ。

「破局じゃねーし」

弘幸も知っている。木町雪穂が死んだのはいじめが原因だと。ただ、弘幸も裕樹達と同じように見ている側の人間だった。

傍観側は関係ない。弘幸のことだから今もそう思っているのだろう。

「お前ら短かったな。まあ、裕にしたら頑張った方だ」

「だから別れてないから。ただの喧嘩」

「なんで喧嘩したんだよ。裕は毒舌だから、もう裕ちゃんなんて嫌いって言われたんでしょ、どうせ」

「お前どんなけ俺に別れてほしいんだよ」

付き合いきれないと、裕樹は席を立つ。

親友とはいえ、なるべく弘幸には喧嘩した理由を話したくなかった。

その様子をみて弘幸が訊く。

「どこ行くの？」

「トイレ」

教室を出る際に、響子の机の前を通る。裕樹は響子の事など気にもとめなかったが、響子の視線を感じたのだった。

開幕#4

トイレの帰り、教室に向かい廊下を歩いていると聞きなれない女子の声に呼びとめられた。

——誰だろうか。後ろを振り向くと、そこには同じクラスの女子が立っていた。

確か名前は滝真奈子。

「あの、伊形君って部活とか何もしてなかったよね。今日の放課後大丈夫かな……」

「え、あ……大丈夫だけど何か用？」

真奈子とは同じクラスだが、真奈子はとても大人しい子なのであまり喋ったこともなかった。だから裕樹は、驚き同様する。

「うん、話があるの」

真剣な顔つきの真奈子。こんな表情を見るのは初めてだった。

「今じゃダメなの？」

「絶対に他の人に聞かれちゃダメな話なの。それに少し長くなりそうなんだけど……時間あるかな？」

「長いのは別にいいけど……。わかった、放課後でしょ？」

「うん、ありがとう。また放課後でね」

そう言って真奈子は、裕樹の前から立ち去った。

「裕樹」

真奈子と入れ違いで、今度は響子が後ろから声をかける。強気な口調で、怒ってる様子だった。

「今の何よ」

腕を組みながら響子が近づいてくる。響子は、さっきの真奈子と話を聞いていたのだ。

「何って、放課後のお誘い」

裕樹は面倒くさそうに、重たい口を開く。

「何で断らないのよ」

「断る理由なんかないだろ。そもそもお前に関係ない。こっちのことに突っ込んでくんないよ、そういうのまじやめてほしい」

響子は唇をかみ締め、目に涙をためている。

やってしまった。ついカツとなると、この口がベラベラと動いてしまう。それが悪い癖だとも分っていないながらも、簡単には治ってほくれない。

「何よ、もう!」

響子是我慢できずに泣き、裕樹の前から走り去ってしまった。

裕樹はそんな響子のことを心配することなく、教室に戻った。

先ほどの、真奈子の話を弘幸にすると、弘幸は面白そうだと笑った。裕樹と響子が喧嘩した隙に告白するんだと、幸弘はない話を勝手に盛り上げた。それはありえないと否定した。

『絶対に他の人に聞かれちゃダメな話』

一体、それはどんな話なんだろう。

開幕#5

——放課後。

真奈子との約束の時間。

裕樹は掃除があるのを思い出し、それを真奈子に伝えようと思ったのだが、真奈子が見当たらない。掃除をサボりたいところだが、それはみんな同じ。後から同じ掃除の人たちにグチグチと言われるのが嫌な裕樹は、仕方なく掃除を続ける。

そのうち自分を探して、教室に真奈子が訪ねてくるだろうと思っていた。だが、真奈子は掃除が終わっても教室に訪ねてくることはなかった。

玄関にいるのかと思い、玄関に向かったが、そこにも真奈子の姿はない。

丁度、部活準備のために廊下を走っていた弘幸に声をかける。

「弘幸、淹みなかった？」

「淹？ ああ、さっきのことで？」

随分と走っていたのか、弘幸は額から流れる汗を拭いながら、「そういえば……」と続ける。

「さっき、玄関にいた淹と片岡が話してたのを見たな」

「響子と？」

「そう。まあ、なんとなく話の内容は予想つくけどな」

ニヤッと笑う弘幸。白くて歯並びの綺麗な歯。

裕樹にも予想はついた。きっと、真奈子が裕樹を呼び出したことだ。

「それいっだよ」

「んー、十分か二十分くらい前。でも、二丁三分の間に俺がまたここを通った時には、二人はもういなかったけど」

「わかった。サンキュー」

弘幸に礼を言い、その場を後にする裕樹。

ひとまず、響子の所へ行こう。確か響子はテニス部だったはず。

靴を履き、玄関を出るとテニスコートのあるグラウンド方面へ裕樹は向かった。

響子に、またいつものように何か言われるんだろう。そう思うと憂鬱になる裕樹だった。

事故 【響子】

ヤバイ。どうしよう。いや、落ち着け！　こういう時に落ち着きが一番なんだ。歯がガチガチと震える……。そうだ、深呼吸だ。

響子は目をつぶり、深く深呼吸を繰り返す。だが、心拍数はそう簡単には下がってくれない。

そつと目を開け、目の前にある光景を確かめる。やはり夢なんかじゃない。現実だ。

「ど、どうしよう……！」

震える声。足までも小刻みに笑っている。まるで、足が木になっただけのようだ。

私は……悪くない。悪いのはあいつ等よ。そつよ、あいつ等！
あいつ等が私に……！

響子の目から、涙が零れる。

「響子！」

後ろから呼ぶ声に、ビクリと反応する。心臓がさっきよりも暴れだす。

ゆっくり振り向くと、こちらに向かってくる裕樹の姿があった。

「ゆ、裕樹……」

こっちに來ないで、お願い。どうしよう。裕樹にコレが見つかったら……。

「テニスコートに行ってもいなかったから探したぞ。おい、どうした？ 何、泣いてんの？ てか、顔色悪いよ。どうし……」

裕樹の言葉と動作が止まる。

見てしまった。いや、見つかってしまった。

倉庫の中いる、滝真奈子。

「なんだよ、これ……」

大変だ、どうしよう。裕樹に見られてしまった。

だが、響子はそこから動くことができない。だが、動けたとしても何をしたらいいのか。そこまで考える冷静さはなくなっていた。

「これ、お前がやったんじゃない……よな」

裕樹は真奈子から視線を逸らすことが出来ない。

「当たり前よ……。部活で使う物を取りにきたら……滝さんが……」

とっさに出た、嘘。本当は違う。

まさかこんなことになるなんて思わなかった。……いや、元々こうしなければならなかったのだ。

これがあいつ等からの絶対の命令だった。

玄関にいた、真奈子を見つけた響子は声をかけた。話があるから場所を移さないかと響子が誘った。真奈子はどこか嫌そうにしていたが、断ることはしなかった。

事故#2（前書き）

血などの表現が含まれています。苦手な方は、読まないで下さい。

事故#2

響子はわざと人気のない、倉庫に真奈子を連れて行った。外部でもこの倉庫はサッカー部と、陸上部。たまにテニス部が使うくらいで、使用者は限られていた。しかも今日はサッカー部の部活は休み。陸上部は競技場で練習。テニス部もたにまにつかうくらい。つまり、今日倉庫をつかう部活はない。グラウンドからも、テニスコートからもこの倉庫は校舎の影になって見えない。生徒や先生も用がなければ近寄ることもないのだ。

殺すなら今日しかないと思った。まずは、裕樹のことについて文句を言ってやろう。

それに文句を言っってからと響子は思った。

「裕樹に何の用があんのよ」

響子は真奈子を睨む。

「あなたが知ってどうするの」

真奈子は冷めた口調で、鼻で笑う。表では大人しい性格をしていたが、本性が現れたのだ。

響子は産まれて初めてこんなにイラだった。頭の血管が切れそうなくらい力をため、強く拳を握った。

「ふざけないでよ!」

響子はそう叫び、力いっぱい真奈子を突き飛ばした。

不意打ちにも、突き飛ばされた真奈子は後方に飛んでいく。力いっぱい突き飛ばされた真奈子は倉庫の中まで行き、今にも転びそうな体制になる。

真奈子が体制を崩すと、ゴン！　という何か硬いものと硬いものがぶつかる音がした。

真奈子は、倒れたまま起き上がらない。起き上がるどころか、ピクリとも動かない。

「……滝さん？」

声をかけても反応がない。

「やだ……。ねえ、滝さん。ちょっと！」

慌てて駆け寄る響子。そこには、大きく目を見開いた真奈子の姿があった。

「何で……。？　死んでる……」

私が……。殺したの……？

突然のことで、状況を上手く把握できない響子。

真奈子の頭部からは、血が流れ出ている。よく見ると、サッカーボールの入った鉄のゴールの、上の部分にも血がついていた。

真奈子は、不運にもそこに高等部をぶつけてしまったのだ。

「...」

事故#3

パニック状態になる響子。

お、落ち着いて。大丈夫。元々殺す予定だったんだから……。でも、本当はこんなことしたかったわけじゃない。あいつ等が殺せつて命令してきたんじゃない。脅されたんだもの。私は不本意だった……。私が悪い訳じゃない。悪いのは全部あいつ等なのよ！

すると響子は、真奈子の手に握られている携帯電話に気がついた。

無意識のうちに携帯に手が伸びていた。

携帯を手にとると、響子は何のためらいもせずそれを開いた。

画面をみた響子の顔から血の気が引いていく。

大変だ……。もっと大変なことが起こってしまった。

画面には、送信済みのメール。なぜこのメールが開かっていたのかは分らなかった。響子が話しかけたとき、真奈子は携帯を開いていた。そのとき、送ったメールを確認していたのだろうか。

送った時刻を確かめる。

送ったのは今日の日付。響子は携帯の時間を見る。三時十五分。このメールが送られたのは大体十分前……。

まだ、間に合う。あいつ等に早く知らせなくちゃ。

「響子！」

後ろから呼ぶ声。

響子は、本能的にすばやく真奈子の携帯を制服の、ブレザーのポケットに突っ込んだ。

目撃 【裕樹】

裕樹の目の前には、顔面蒼白の響子と、頭から血を流した真奈子。真奈子に関しては、横たわったまま動かない。

「響子……？」

放心状態の響子に声をかけると、我に返ったように響子は裕樹の方をみる。

「な、何？」

「俺、先生呼んでくるよ」

今は、驚いたり泣いたりしている場合じゃないんだ。こういう時こそしっかりしなくちゃいけないんだ。

裕樹は、胸のシャツを強く握り締めると学校の玄関へ走り出す。

玄関に向かう先、裕樹はフツと思う。

滝の話って一体何だったんだろうか。告白とかそういう感じじゃなかったように思う。ただ、なんとなく。

なぜだか、胸いっぱい広がっていく嫌な予感。胸騒ぎが収まらないのだ。

悪夢はまだ、始まったばかりだった。

衝突

それは木町雪穂が死ぬ、ほんの少し前のこと。

「いったあ……」

菅原奈都が手に持っていた山積のプリントを床に散らかす。

「ちょっと何するのよ！ プリントが落ちたじゃん」

奈都はすかさず木町雪穂に文句を言う。

雪穂は冷たい視線で奈都を見る。

「何するのって、菅原さんが勝手にぶつかってきたんでしょ。あたしに害はないよ」

「はあ？ ふざけないでよ」

クラスの視線が、二人に注目される。

奈都は偉そうに腕組をしながら睨みつける。

「拾いなさいよ」

「どうして？」

そこで、二人の間に松村弘幸が口をはさむ。

「木町も菅原も仲良くしろよな。お前らガキか。木町も拾ってやれよ」

「ガキにさせるほど、菅原さんが嫌いだから仕様がないう」

ひとり言のように呟く雪穂。もちろんそれは、奈都の耳にも届いている。

二人が揉め事をするのは、これが初めてではなかった。何が気に食わないのか、雪穂は奈都を毛嫌い、軽蔑する。奈都もそんな雪穂が気に食わない。二人は些細なことでも、もめることが多かった。

「なめてんの？」

怒りに震える奈都が、拳を強く握り締める。

「あたり前じゃない」

あからさまに、雪穂はバカにしたように鼻で笑う。

「この！」

奈都は怒りのあまり、雪穂の頬にビンタを食らわせた。

ざわめく教室。中には、そこまでもしなくても、という声がささやかれる。

屈辱に顔をゆがめる奈都。手を出してしまったことにも、悪くは思わない。

「暴力に走るなんて、菅原さんって弱い人間ね」

ぶたれた本人は、平気なようで、冷たい視線を送り続けている。
ただ、左頬が、うつすらと赤い。

「うるさい……！」

奈都はそのまま教室を出て行く。

雪穂は何も言わず、ただ黙って床に散らかったプリントをひろ々と、それを奈都の席に置いた。

激怒 【奈都】

許さない。生まれて初めて人を思いっきり殴った。

あれから教室を出た奈都は、三限目までサボり、鞆を手に持ちかえろつと廊下を歩いていると、授業中にも関わらず、前方に男子生徒が歩いている。

「連夜―」

奈都は、茶髪頭の杉宮連夜に声をかける。

後ろを振り向いた連夜は右手を上げる。

「おー。奈都、帰るの？」

「うん。馬鹿らしいもん。やってられない。本当に許さない、あの女」

「奈都がマジギレしたところ、俺はじめて見たわ」

笑う連夜の隣で、奈都がムツとする。

すると、突然「あ……」と思い出したかのように奈都が声を出す。

「いいこと考えた。ねえ、連夜。ちょっと手伝ってよ」

連夜の顔を見て、怪しく笑う。

「なんだよ、気持ちわりーな」

「あの女を痛めつけるの。連夜もやろうよ」

連夜はどうでもよさそうに返事をする。奈都の頼みは断ることはしない。

「じゃあ、渉のところ行こう。渉も誘うの」

「あいつなら、また保健室だろ。学校は寝るために来てるもんな」

奈都は笑いながら相槌を打つと、二人は保健室に向かった。

予想通り、カーテンの締め切られたベッドに藤川渉が寝ていた。

「おい。起きろよ、渉」

気持ちよさそうに寝ている渉に声をかけた。

寝返りをうちながら、ゆっくりと目を開けた。

「誰……?」

寝ぼけたようにボソリと呟く。

「起きろって」

渉は、「うるさいな……」としびしび体を起こし、枕の横にあった黒淵の眼鏡を手に取ると、それをかけた。

「何の用？」

寝ているところを起こされ、不満の色をかかっている様子。

はたから見れば彼は、真面目そうに見える。だが、授業は普段、出ることもなく保健室で寝ている。たまに出てると思えば、机に顔を埋めて寝るだけ。人はみかけによらずとは、まさしくこのこと。

「早くすませて」

無愛想、クール、顔もよし、授業はほとんど出ないくせに成績もよし。女子が騒ぎ立てる物を、彼は揃い持っている。ただ、彼は他人には興味がないようで、むしろ嫌っているようにも見える。彼女がいるだなんて、奈都はそんな噂は一度だって聞いた事はなかった。

激怒#2

「お前ほんと、無愛想だよな。もっと愛想良くにこやかに過ごせよ」

「うるさい。余計なお世話だし。用がないなら早く帰って。こっちは眠いんですけど」

「涉に面白い話を持ってきてあげたの」

連夜の横にいた、奈都がちよこんと頭を出し、ポニーテールに結ばれた長い髪の毛を揺らす。

「面白い話？ 遠慮するよ」

いかにも嫌そうな顔をつくると、またベッドに横になり、毛布の中に隠れた。

「おい、話くらい聞けって」

連夜は、無理やり涉を起こす。

「同じクラスの木町雪穂って分るでしょ。ちょっと懲らしめたいと思っただ。涉も手伝ってよ」

「やだ。意味わからないし。てか、それ僕関係ないじゃん」

「お願い！ あたしら幼馴染じゃん。それくらい手伝ってくれてもいいじゃん」

奈都は両手を合わせ、渉にお願いする。

「なんでも幼馴染って使うのやめてよ」

困ったように、視線を泳がせたあと、小さなため息をついた。

「一緒にいるだけね。僕は何もしないよ」

呆れたように渉は二人を見る。その答えを聞いた奈都は、飛び上がって喜ぶ。

「ありがとう、渉！　じゃあ、私帰るね」

用が済むと、奈都は二人に別れを告げ、保健室を出て行った。

「我がまま女王様……」

そんな奈都を見て、渉はボソツと呟いた。連夜に聞こえないように言っただつもりだったが、それはちゃんと連夜の耳に届いてしまっていたらしい。

「そんなこと言うなよ。あれでも俺の彼女様」

「そうだね……」

あくびをしながら渉は相槌を打った。

「俺も教室戻るわ。じゃーな」

連夜も奈都に続き、保健室を出て行った。

涉はやつと寝れると、眼鏡を外すとベッドに横になった。

二人【真奈子】

「あーあ。いいよね、真奈子は藤川くんと同じクラスで」

昼休み、露木千秋はおにぎりにかじりつきながら、羨ましそうに真奈子を見る。

「藤川涉の何がいいのさ。私にはちょっと理解し難いかなあ」

真奈子はわざと千秋を怒らせるような言葉を選び、千秋の反応を楽しむ。案の定、千秋は真奈子に怒鳴る。

「ちょっと！ 何言ってるのよ！ 藤川くんの悪口いわないでよ。超格好いいし、頭もいいじゃん。あとスタイルと！」

格好と、頭とスタイルが良ければ誰でもいいのかと、真奈子は疑問に思う。一番大事なのはやはり性格ではないかと思われる。

「だって藤川涉、なんか怖い」

「怖いってあんた、いい加減その対人恐怖症治したら？」

「対人恐怖症じゃないって。ちょっと人と話すのは苦手だけど、藤川涉はそれとこれとは別の話。なんかあの人、他の人を近寄らせないオーラみたいながあるの」

「えーでも、ほら。よく真奈子と同じクラスの菅原さんと杉宮くんと一緒にいるじゃん」

「それは、三人が幼馴染だからでしょ」

ええ！ と驚く千秋。口に入ってたご飯粒が真奈子の方へ飛んでいく。

汚い。もつと行儀よく食べて欲しいものだ。

「そんなの初耳！ 何その情報。あたし菅原さんとライバルだと思つてたのに……菅原さんの方が立場有利じゃん！」

昔の千秋はこんなに喋る子じゃなかった。

真奈子と千秋は、中学生の頃からの付き合いで、お互い引つ込み思案な性格だった。だが、何かと気が合う友達として仲は深まった。喧嘩も一度だったことがなかった。真奈子が千秋を変え、千秋が真奈子を変えたのだ。そうやってお互いやってきた仲だった。

「千秋何もしらないの？ 菅原さんは杉宮君と付き合ってるんだよ」

またも、驚く千秋。飲み物を飲んでいた千秋は、危なく口の中のものを噴出してしまいそうだった。

「ちょ、なにそれ！ もー早く言ってよねー」

なぜか、自分が悪者になってしまった真奈子は呆れながら、昼食を終えた。

「あ、ねえ千秋」

真奈子は、先ほど教室で起こったちょっとした事を思い出した。

「何―？」

千秋も昼食を終え、空になった弁当箱をハンカチで包みながら返事をする。

「菅原さんで思い出したんだけど、菅原さんが木町さんをぶつたの」

「え、何で？」

興味深い話に、千秋はつい手を止めて聞き入る。

「よく事情は分らないんだけど……木町さんが菅原さんにぶつかつたらしくて、それで木町さん謝らなかつたの」

「え、それだけで殴つたの？」

「うーん、なんか口論もしてたしね。菅原さんってそういう人じゃない。だからそんな人と関わってる藤川渉は、私あんまりオススメしないよ」

「えーでも、好きなもんは仕様がないでしょ」

千秋は再び手を動かし、ひとり言のように呟いた。

虚無 【響子】

遺影の中で優しく微笑む滝真奈子。

線香の臭いが鼻につく。響子は幼い頃からこの臭いが嫌いだ。呼吸を繰り返すたびに、不快感がたまっていく。

早くこの場所から離れたい。線香の臭いよりも、罪悪感で押しつぶされてしまいそうだ。

私はとりかえしのつかないことをしてしまった。

許されることのない罪。償うことの出来ない罪。

「裕樹、少し外の空気を吸ってくるね」

隣にいた裕樹に声をかけると、ついにこの空気に耐え切れなくなった響子は動き出す。

外に出ると、少し気分が楽になった気がした。線香の臭いがしないからだろうか。

入り口のすぐ横にあるベンチに腰を下ろし、地面を見つめる。これからのことを考えた。だが、考えても答えが見つからない。

滝さんの死が、事故死じゃないと知られたら……。いや、警察は言わないだけで、他殺と考えて捜査を進めているだろう。学校側が、勝手に事故死と言っているだけだ。第一、滝さんがあの倉庫に行く

理由がない。疑われるのは、第一発見者となっている私だ。

マスコミでは、滝さんの事故死について大きく取り上げられていた。同じ学校、同じ時期に二人もの死者。そして、同じクラスの間となれば、その二つをつなげたがる。マスコミにとっては、所詮ただの面白いネタなんだ。

この罪悪感から解放され、マスコミのネタになるか。一生、罪悪感と罪を背負って生きていくか。この二択しかない。

私は一体、どうしたらいいんだろう。

「どうしたの？ 片岡さん」

心臓がドキリと跳ね上がる。顔を見なくても、この声が誰のものなかくすぐに分った。

後ろを振り向く。それが間違っていることを祈って。

「……菅原さん」

祈りは天に届かなかった。あたり前だ。たとえ神がいたとしても、絶対に神は私の願いなんか叶えようもしない。

虚無#2

「あんたほんとにやったのね」

感情のない声色で、奈都は響子の隣に座った。

「まあ、私たちもやってもらわなくちゃ困ってたけどね。あなたがやりそうもなかったら、私たちが滝を殺してただろうね。でも、まさか本当にやったのは驚かされたわ」

クスリと馬鹿にしたように笑う。響子は、奈都の感性を疑った。

「菅原さんって、罪悪感とかそういうものないの……？」

「罪悪感？ 何それ」

奈都は鼻で笑い、続ける。

「私がそんなの感じていたら、生きていけないわよ」

言葉がつまり、ゴクリと喉が鳴る。

どうしてこの人は笑っていられるの？ そういえば雪穂が死んで、悲しんでいるみんなの中で平然としていたっけ。この人にとったら他人の命なんて、虫けらみたいなものなんだ。

「いい？ わかってるんでしょ？」

響子を覗き込む表情からは、先ほどの笑みは消えていた。

「誰かに言おうなんて考えてるみたいだけど、そうはさせないよ。誰かさんみたいになりたくなかったら一生その口を閉じてることね」

奈都はそう告げると、ベンチから腰を上げる。自動ドアが開くと、そこで立ち止まり最後に言った。

「あ、そうだ。露木千秋のこともよろしくね」

中に入っていく奈都の背中を見つめる響子。

にぎりしめていた手のひらに、くつきりと爪の跡が残っていた。

『誰かさんみたいになりたくなかったら』

奈都の言った言葉が、響子の頭の中で繰り返される。

これからどうするかなんて、響子の中ではもう決まっていた。

通夜も終わったのだ。もう少し我慢すれば家に帰れる。そう自分に言い聞かせて、裕樹の元に戻る響子。

「大丈夫か？」

心配し、声をかけてくれる裕樹に、響子は頷くだけ。声はでなかった。

怪物 【裕樹】

『木町雪穂の亡霊』

『滝真奈子の亡霊』

なんて学校中でささやかれるようになったのは、三日前。

きっと今も二人はこの世を彷徨っているんじゃないかと、見たこともないのに想像を口にするヤツがどんどん増えてきた。

そもそも、こんな噂がささやかれるようになったのは、露木千秋が行方不明になってからだった。

二組は呪われている。同じクラスから、二人もの死者が出ているのだ。そう思われても、裕樹は仕方のないことだと思ったが、周りから避けられる学校生活に少し嫌気がさしてきたところだった。

「裕樹……」

まだ少し気まずそうに話しかけてくるのは響子。

響子と仲を戻したのは、滝真奈子の通夜の時。

『あのときのことと、今までの態度のこと、ごめんなさい』

先に謝ってきた素直な響子に、裕樹は自分も悪かったと、響子を許した。

「何？」

「あの……」

首をかしげる裕樹。

「どうしたの」

「うん……」

何か言いたげな響子。目が合うだけじゃ、伝わるものも伝わりはしない。

「あのね、裕樹。私、言わなくちゃいけないことがあるの」

真剣な顔つきに、どうやら真面目な話なんだと、裕樹はおしはかる。普段、そういう話はしないので、どんな内容なのか全く検討もつかなかった。

だが、その会話の中を遮るように声が入る。

「話してるところ悪いんだけど、片岡さん。ちょっといい？」

菅原奈都が響子に用事。なんだか凄いコンビだな、と裕樹は珍しがる。

「……う、うん」

ぎこちなく返事をする響子。

助けて。

響子の視線になんとか気づいていた裕樹だが、まさか助けを求めるものだとは知らず、それには気づいてない振りをした。

「お前らって、いつからそんなに仲良くなったんだ？」

響子に問いかけたつもりだったが、奈都が口を開いた。

「女子はみんなフレンドリーなの。すぐ仲良くなれるんだから。ほら行こう、片岡さん」

奈都は薄く笑うと、響子の腕を引っ張る形で教室を出て行った。

何がフレンドリー？ つい最近まで木町雪穂をいじめていたヤツがよく言えるものだ。自分の所為で木町雪穂が死んだと思わないのか。何で笑っていられるんだよ。

二人が出て行った教室の出入り口に目を向けながら、裕樹は怒りに震えた。

裕樹は少し、不安であった。響子が奈都と接すること。何かと面倒だな、と思うときもあるが、やっぱり彼女として心配する。あいつ等がまた繰り返すようなことをしているんじゃないか。さきほど、響子の話そうとしていたこと。もしかしたらそのことに、関係していることだったのかもしれない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5248j/>

秘密

2011年10月6日16時30分発行